







金有聲 筆「山水花鳥図押絵貼屏風」  
第一扇「金剛山図」(清見寺所蔵)

「侍」です。貴族の護衛で弓矢剣術に長けた武人のことです。ところが、秀吉の朝鮮侵攻の際に捕虜になった儒学者の姜沆(カンカウ)に藤原愷窩が感化され、その弟子の林羅山が徳川家康に重用されて、林羅山は江戸時代の官学の祖になりました。以来、サムライは筆をとり、学問をし、城に詰め、経世済民を職分とします。サムライが貴族の護衛の「侍」から士農工商の「士」になりました。そもそも、それは誰のおかげかというところ…

**李氏** 朝鮮通信使。  
**知事** 朝鮮通信使もそうです

が、最大のきっかけは朱子学者姜沆が日本に連行されたことです。姜沆は、当時の朱子学の最高峰・李退溪(イテウキ)の弟子筋です。朝鮮由来の朱子学が江戸時代の官学になりました。サムライは城に詰める「士」になった。「士」とは学徳のある人のことです。士の職分は経世済民で、国を治めて富ますことが仕事です。その意味が「富士」の漢字に仮託されています。士が富を支え、富は士の育成のために使うということです。人類は75億の人口ですが、誰もが異なる唯一の人間、オンリーワンです。人こそかけがえない「不二なる富士」です。それらをすべてアップグレードすればメタ富士になります。

の富の源泉です。富を産む人材の「士」になることが尊ばれ、「富士」の表記になった。その起源は家康による朱子学の重用、具体的には朝鮮経由の朱子学の導入であったと思います。  
**李氏** ベストワンからオンリーワンに。そうすると喧嘩もしない。自分が皆オンリーワンだから。  
**知事** だれもがオンリーワンだということは、一人ひとりが中心だということです。一人ひとりが中心だということは、多中心だということです。日本の昔の呼称は「倭」でした。倭は「小さな人」という意味

で、あまりいい意味の漢字ではない。それを日本人は「和」に変えました。  
**李氏** 「和をもって貴しとなす」  
**知事** 元は「論語」に出てくる文で、「礼之用和為貴(礼をつくすにはまず和をもって貴しとなす)」とありますが、聖徳太子が「和をもって貴しとなす」と独立して用いてきました。3と4の和は7、1と2の和は3というように、和には足すという意味があります。「大きな和」と書いて「大和」ですが、日本人は「大和」を「やまと」と訓読みして自らのアイデンティティにしました。大和とは大きく足して調和することです。「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」です。異なるものを足して調和させる。それは多様性の許容です。中心を足し合わせれば多中心で、すべてを足し合わせれば全体です。それが大和です。全体を集約するのが中心ですから、どの中心にも全体性があります。先生も私もそれぞれ中心で全体でもある。人それぞれ

が中心です。中心の多様性が生命世界の真相ではないでしょうか。どの存在も interchangeable、取り替えができません。どのように小さな命もかけがえない命を生きている。まさに神は細部に宿ります。富士山をどこから見ると最高でしょうか、十国峠、山中湖、三保松原、日本平等々と無数にあげることが出来ます。どれも皆それぞれ最高なのです。どれもこれも最高ということは、多中心であり、多視点を許容するということです。

ない「不二なる富士」です。それらをすべてアップグレードすればメタ富士になります。  
**李氏** メタ富士になると韓国の金剛山までが見えることになり、まず、朝鮮通信使が日本に行くと、初めて見聞した富士山を銀の山、玉の峰と詠んでいます(上垣外憲「富士山―聖と美の山」参照)、そのような嘆賞よりは、金剛山と富士山を前においてどちらが名山かで競り合ったという、通信使のこぼれ話にもっと興味を湧いてくるんです。高さは富士山ですが、みね(峰、韓国語でボンウリ)の数では、金剛山は一万二千峰ですから勝る。基準をどこに置くかによって口論はきりがない。そこで、目を自然の富士と金剛からそらして、北斎と謙齋(※6)に向けると答えが返ってくるんですね。

生まれるというわけですね。  
**李氏** 金剛山は峰が連なっていますが、富士山は峰が一つで聳え立っている。いろんなレベルで絶妙なコントラストを見せています。火と水、高さと深さ、シンプルとバラエティなど、富士山は金剛山によって、金剛山は富士山との出会いによって隠れていたオンリーの意味が明らかになる。通信使によって、お互いに全然違った山があることを知って、さらに富士には北斎あり、金剛山には謙齋があるということをわかれれば、もつと生命は広く深くなるんです。北斎は変えて描きました。しかし謙齋は一万二千峰(みね)の全図を描くためにはすべての山の峰よりもつと高い天から見おろすしかない。不思議にも謙齋が描いた金剛山の姿は一気にドローンから写したように見えるんです。見上げる富士には北斎があつて、見下ろす金剛山の謙齋があつたのです。富士と金剛山の出会いには北斎と謙齋、またはサ

ント・ウィクトワールのセザンヌとの出会いですね。それぞれ違うオンリーワンが手に手を取って動きだすのです。政治家とビジネスマンには想像しがたい世界が画幅の文化空間に現れるのです。量子物理学者ニール・ス・ボーアがノーベル賞を受賞して自分でデザインした紋章の太極図に contrastaria sunt complementaria(対立は相補なり)と書いたあの世界なんです。これを新羅の学者、古言(崔孤雲※7)は接化群生と言いました。文字そのままを讀んでも接は access、化は becoming、群は diversity、生は lifeです。21世紀のキーワードが皆入っていますね。

※6 謙齋(キョムジエ)：鄭敷(啓臣、チョン・ソン)1676年 - 1759、朝鮮時代の美濃山水画で有名な画家。謙齋は号  
※7 崔孤雲(チュ・ゴウン)：崔致遠(チュ・チウオン)858年-没年不詳、新羅末の文人。孤雲は号

**李氏** 多視点を足し算で行くと最後には、平面の視点から三次元の高いところ上がって見下ろさなければならぬ。ホロニク的な視点が必要ですね。視点が高くなるにつれて高くなるにつれて、十国峠、山中湖を皆一気に含むためには頭上三尺にアップグレードする。ずつと上上げていくと、メタ富士、全体の姿が現れるということですね。  
**知事** 富士山は三万人の富士で

す。また、各人にとっては二つと

た、まったく新しい取り合せも

らジャンケン構造の接化群生